

新岡垣風土記

第433回

ミャンマー（ビルマ）と岡垣③

岡垣歴史文化研究会 入江 東樹

【ビルマ戦：北東部での戦い】

岡垣町からの兵士は前号で紹介したように、菊師団や龍師団に所属していた。

「北東部での戦い」は『菊と龍』（相良俊輔著）を参考にして、北部と東部に分けて執筆する。今回は北部である。

●ビルマ北部での戦い

1943（昭和18）年2月、菊師団は北ビルマに配置された。北部のフーコンやミートキーナ、バーモ、カータ、メイミョウの5地区の防衛に当たることになった。

ここでの主な役割は2つある。1つは前にも触れたが、イギリス軍による新たな「援蒋ルート」の工事計画を阻止することであった。

もう1つはそれと関連することであるが、イギリス軍による日本軍への反撃を防ぐためであった。翌年2月から、イギリス軍の反

撃がフーコン地区から始まった。日本軍は、後退一方だった。

ミートキーナは北ビルマのカチン州の州都であり、要衝の地であった。

ミートキーナ地区の守備隊は、歩兵第114連隊が中心であった。兵士は約千人しかいなかった。それに、野戦病院には患者が約300人もいた。

同年4月には、ミートキーナもイギリス軍の攻撃を受けるようになった。菊師団の戦死傷者が増えていき、弾薬も乏しくなった。

カータの菊師団司令部はミートキーナ守備隊長として、水上源蔵少将を派遣したが、戦力を回復することはできなかった。

同年7月、水上少将は、司令部に「敵ハ本格的攻撃ヲ開始セリ、陣地設備薄弱、食料、弾薬トモニ僅少ニシテ、長期ニワタル持久ハ困難ナリ」と報告した。しか

し、司令部からは「ミートキーナヲ死守スベシ」との命令であった。

そこで、水上少将は独断で、残存の守備隊兵士に転進命令を出した。自らは司令部の命令に反した責任を取るために、拳銃で自決した。

転進命令に従った兵士らは後退の途中も攻撃を受け、生還できなかった兵士も多数いたという。

岡垣の「戦没者名簿」では、戦没地がビルマとしか書かれていない人たちがいる。それでもミートキーナ周辺だけで、19人の戦没者名を読み取ることができる。

北九州若松生まれの作家に、火野葦平がいた。火野は1938（昭和13）年、自作の『糞尿譚』で、芥川賞を受賞した。

火野は陸軍報道班員として、あちこちの戦地に派遣された。ビルマ戦にも派遣された。

火野は1944（昭和19）年3月からのインパール作戦に従軍し、カレワ（地図参照）まで行った。同行者には作曲家の古関裕而や洋画家の宮本三郎らもいた。

火野は陸軍省から「インパール入城の唄」の作詞を依頼され、古関が作曲することになっていた。だが、インパール作戦がうまくいかず、



▲菊師団の防衛地区（①～⑤）

報道班員らは引き返すことになったため、「唄」は作成できなかった。その後、火野は北ビルマに向かい、護衛の兵士が付いた。

同年8月18日、火野はカータの菊師団司令部に着いた。その夜、火野の歓迎会が料理店で行われた。フーコンなど北ビルマの惨烈な戦闘の回顧談となった。火野はメモを取りながら、「生きて帰ったら、北ビルマのことや中国の雲南省で苦しい戦いをしてる龍師団のことも書くよ」と語った。

しかし、この執筆は実現しなかった。

つづく